

「針と尾びれ」

桐朋女子高等学校

三河　絵毬

表紙

放課後の図書室は、いつも西日のせいでオレンジ色の水槽の底みたいだった。埃っぽくて、ひんやりとしていて、世界のすべてから見放されたような静寂が、高い天井から頼りなく吊り下がっている。

カサ、と乾いた音がして、私の目の前に一冊の自由帳が差し出される。差し出した主、幼馴染の彼女は、私がノートを受け取るまで、ずっとその姿勢のまま。

彼女の瞳を見るたび、私はいつも、言葉の通じない新種の生き物と対峙しているような、奇妙な感覚を覚える。薄気味悪い。

そこには怒りも、喜びも、焦りもない。ただ、じっとこちらを観察しているような、凪いだ水面のような目。世俗の余計な感情が根こそぎ削ぎ落とされたかのようなその顔からは、彼女が今、何を考えて私にこのノートを渡してきたのかが、全く読み取れなかった。

「なに？これ」

私が尋ねても、彼女はただ小さく瞬きをするだけだ。口を開く気配すらない。彼女は昔からそうだ。親しい人間が相手なら、言葉にしなくても自分の気持ちがすべて伝わっているとでも思っているのだろう。そんな超能力じみたことができるなら、人間苦労しないというのに。その独りよがりな沈黙が、私の不器用なプライドをかすかに逆立てる。

仕方なくノートを開くと、そこには私が昨日、もう飽きた、と言って投げ出した、未完の物語の続きが描かれていた。

私が描いた、完璧ではない、だからこそ嫌になって放り出したはずの歪な世界。彼女はその続きを、緻密さと、私には到底真似できない集中で、最後まで描き切っていた。

訳が分からない。相変わらずだとおもった。同時に、胸の奥がじりじりと焼けるような温度を伴った不快感が這い上がってくる。

私は幼いながらに完璧主義者だった。テストの点数も、宿題の習字も、クラスの誰よりも綺麗にこなさなければ気が済まなかった。けれど、少しでも自分の限界や、理想に届かない醜い成果が見え始めると、私は耐えられなくなる。挫折の痛みを味わう前に、自ら進んでそれを投げ出し、別の新しい分野へと逃げ出すのが私の常だった。

周りの大人はそんな私を多趣味で器用な子と褒めたし、私もまた、慢心や焦りを他人に悟られないよう、いつも謙虚で内向的な子供の仮面を被っていた。都合の悪い質問をされれば、黙って微笑むか、話を誤魔化せばいい。そうやって自分の柔らかい内面を守るために、私は無数の鋭い針を周囲に張り巡らせて生きていた。ちいさな獣が外敵から身を守るように。

だから、隣にいる彼女のことも、ただのマイペースで、無害な、言葉の足らない小動物だと思い込もうとしていた。自分の都合のいいように、彼女という存在を解釈していたのだ。

でも、このノートの白ページを埋め尽くす黒い線の奔流は何だろう。

彼女の描く線には、私の挫折をあざ笑うような、静かで強固な意志が宿っていた。口元には何の笑みもない。言葉も一切ない。ただ、静かにそこに佇みながら、私の領域をじわじわ

と侵食し、私を遥か後方へと追い越していく。
それはまるで、音もなく近づいてくる大きな魚影を、すぐ背後に見た瞬間のような心地だった。
私は自分の針が、恐怖で逆立っていくのを感じた。このままこのノートを続ければ、私の不完全さが暴かれ、彼女という底知れない怪物に喰い尽くされてしまう。
「私、もうこれ飽きちゃった。明日からはシール集めしよっかな」
私は精一杯の作り笑顔でノートを閉じ、彼女に突き返した。都合の悪い現実から目を逸らし、また別の安全な場所へ逃げるための、私のいつもの防衛本能だった。
彼女は返されたノートを受け取り、やはり何も言わずに、ただその凪いだ瞳で私をじっと見つめていた。その目が、私には「また逃げるんだ」と無言で告げているように思えてならなかった。彼女の胸の内にある、何が何でも一番へ手を伸ばそうとする剥き出しの向上心に、私はこの時まだ、気づくよし元気がなかった。
私たちはそうやって、言葉を交わさないまま、お互いの孤独をすり合わせるようにして、小学生の退屈な放課後を消化していった。

中学生になると、私と彼女の境界線はさらに歪にねじれていった。
クラスが離れ、互いの部活も異なり、表立って机を並べる機会はなくなった。それでも、放課後の特定の時間、特定の寂れた高架下で待ち合わせをし、言葉もなく並んで家路につくという些細なルーティンだけが、剥がれかけのシールのように私たちの関係を繋ぎ止めていた。
その日は、容赦のない秋の雨が降っていた。
一本のビニール傘の狭い骨組みの下、私たちは肩を寄せ合って歩いていた。ビニール越しに透ける灰色の空と、アスファルトを叩く無数の水音が、世界を隔絶する薄い壁のように私たちを包み込んでいる。
私の心の中は、その雨雲よりも暗く、刺々しい焦燥で満たされていた。
その前日、定期テストの結果が返ってきていた。私の成績は学年でも上位の部類だった。けれど、それは私の理想とする完璧には程遠い、妥協と限界の透けて見える泥臭い数字でしかなかった。慢心や必死さを他人に悟られたくない私は、友人たちに「全然ダメだったよ」と自虐的な謙虚さを装って笑ってみせたが、内側ではプライドが血を流していた。まただ。また自分の限界が見えてしまった。これ以上傷つく前に、別の何かへ逃げ出さなければならないという、いつもの逃避癖が首をもたげ始めていた。
隣を歩く彼女に、私は自分の都合の悪い進捗を隠すように、硬く口を閉ざしていた。彼女が何かを聞いてくることはない。ただ、淡々と前を見つめ、雨の侵入を拒むように一定の歩幅で歩いている。
彼女のその静座するような佇まいが、今の私には酷く恐ろしかった。

私から見た彼女は、もはやかつての無害な稚魚ではなかった。言葉を発しないまま、虎視眈々と私の領域を脅かす、正体の知れない大型の深海魚だった。

彼女は言葉の表現が致命的なまでに拙く、顔にも、声にも、文章にすら感情を乗せることができない。何を考えているのか、その厚い皮の向こう側が全く見えないのだ。

だからこそ、私は彼女の沈黙を、すべて自分に対する品定めや侮蔑として都合よく解釈していた。私が全然ダメだったと自虐を口にしたとき、彼女がただ小さく頷くだけの仕草も、私の目には、あなたの限界はその程度だね、そう冷徹に告げられているように映った。

息が詰まりそうだった。狭い傘の中は、言葉の通じない捕食者と二人きりで閉じ込められた檻のようだった。

「私、次の塾のテストが終わったら、もう特進クラスやめようかなって思ってるんだ」

沈黙に耐えかねて、私は自分の防衛本能を吐き出した。挫折する前に、自ら進路のハードルを下げるための言い訳。それを聞いた彼女は、歩みを止めることもなく、ただ一瞬、その視線の読めない凪いだ瞳を私に向けた。

「そっか。私は、次は一番になるよ」

静かでひどく平板な声だった。だけどその一言は、私の逆立った針の隙間に突き刺さるに十分な鋭さがあった。彼女に悪気があるのか、それともただの独り言なのかすら分からない。けれど、自分の弱さを隠して逃げようとする私を、彼女はその圧倒的な、しかし静かな上昇志向の熱量で踏みつぶしていこうとしているように感じられた。

彼女は、私が都合の悪い現実から逃げるために黙り込む姿を、おそらく「次の目標へ向けて集中しているのだ」と、彼女自身の都合のいいように解釈しているのだろう。言葉を尽くさずとも、自分たちの熱量は同じだと信じ込んでいる、傲慢なまでのエゴイズム。

私たちは、同じ一本の傘を分け合いながら、全く別の孤独を見ていた。

私は自分の柔らかい中身を守るために針を逆立て、彼女は言葉という道具を放棄したまま、私を置いて遠くへ進んでいく。

水飛沫を上げる車の音にかき消されながら、私たちの互いにすれ違った意識は、修復不可能なほどに冷たく発酵していった。

高校生になり、私たちの世界は完全に冷え切った冬を迎えていた。

通う学校もクラスも離れ、あの雨の日のように一本の傘を分け合うこともなくなった。たまに廊下やすれ違いざまに見かける彼女は、以前よりもさらに強固な、底の知れない気配を纏っているように見えた。風の噂で、彼女が特定の分野で驚異的な成果を上げ、常にいちばんの座に君臨し続けていることを知った。

言葉を持たない怪物が、ついにその牙を完全に剥いたのだと、私は遠くから絶望していた。

高校二年の冬、放課後の進路指導室の前。廊下は底冷えがして、蛍光灯の白い光が容赦なく

床を照らしている。私の手元には、進路希望の調査用紙が握られていた。
私はまた、逃げようとしていた。
　完璧主義という名の病は、年齢を重ねるごとに私の首を強く絞めていた。どれだけ努力しても自分の成果に満足できず、他人にその必死さや醜い焦りを見せたくないがために、私はいつも、これからは別のことに挑戦するからと、そつなく新しい分野へと乗り換えてきた。周囲は相変わらず私を何でもできる多才な人と評価したが、その実態は、傷つく前に戦場を変え続けているだけの、臆病な獣に過ぎなかった。
都合の悪い現実から目を逸らし、安全な逃げ道を記した用紙を見つめていると、不意に背後に気配が立った。振り返るまでもない。言葉はなくとも、その圧倒的な沈黙の質量で分かった。彼女だった。
彼女は私の手元にある用紙を、あの小学生の図書室の時と同じ、凪いだ瞳でじっと見つめていた。その表情からは何も読み取れない。口調も、表情も、文章も、彼女はすべてにおいて感情の表現方法を持ち合わせていない。だからこそ、私には彼女の存在そのものが、自分を追い詰めに来た支配者のように思えてならなかった。
私の都合の悪い選択を、彼女はまた、その何も言わない瞳で見下し、品定めしている。私はたまらなくなって、用紙を胸元に隠すようにして、硬く口を閉ざした。沈黙という名の針を逆立てて、彼女を拒絶しようとした。
　いつもなら、彼女はそのまま何も言わずに去っていくはずだった。言葉にしなくてもお互いの気持ちは伝わっているという、彼女なりの傲慢なエゴイズムのままに。
けれど、その日は違った。
彼女の視線が、私の逃げ腰の姿勢に、初めて明確な熱を持って突き刺さった。感情の乗らない、ひどく平板な、けれど私の鼓膜を劈くような拙い声が、静まり返った廊下に響いた。
「なんで、またやめるの」
心臓が跳ね上がった。私は彼女から目を逸らし、話を誤魔化そうと喉を鳴らしたが、言葉にならなかった。都合の悪いことを突かれたヤマアラシは、ただ丸まって針を突き出すことしかできない。
「私は、あなたに勝ちたいのに」
平常の凪いだようすとは異なるその声は、濁流のような質量を持って私に押し寄せてきた。勝ちたい？　何を言っているのだろう。私を見下し、遙か先へ進んでいった怪物が、なぜ今更そんなことを言うのか。
「あなたがいちばん凄いから、私はそこに行きたくて、ずっとやってるのに。どうしていつも、私が届きそうになると、あなたは違うところに行こうとするの」
　それは彼女が生まれて初めて口にしたであろう、剥き出しの、そして致命的なまでに不器用な本心の音だった。

彼女は、私を見下す冷徹な猛獣などではなかった。言葉の表現が拙すぎるがゆえに、誰にもその胸の内の熱量を分かってもらえず、たった一人で暗闇を突き進んでいた、ただの孤独な人間だったのだ。そして、言葉にしなくても伝わっているという彼女のエゴは、私という存在に対する、あまりにも不器用な甘えだった。

対する私はどうだ。彼女を言葉の通じない怪物だと勝手に決めつけ、自分のプライドを守るための防壁に仕立て上げていた。傷つきたくないという私自身のエゴが、彼女の本質を見ようとせず、私自身の孤独を肥大化させていたのだ。

彼女の拙い言葉の刃が、私の張り巡らせていた鋭い針を、根こそぎ叩き折っていく。

私は生まれて初めて、他人の剥き出しの孤独と、自分の醜い我欲の正体を、冬の冷たい廊下で直視することになった。

彼女の剥き出しの言葉が、冬の冷たい廊下に残響となって消えていく。

私は何も言い返せなかった。都合の悪い現実から目を逸らすためのいつもの沈黙ではなく、自分の頭を支配していた被害妄想の城が、あまりにもあっけなく崩壊してしまったことへの、純粋な呆然だった。

彼女の顔を見る。相変わらず表情の起伏は乏しく、何を考えているのか分かりにくい、いつもの彼女だった。けれど、その奥にある瞳が、寒さに震える子供のように張り詰めていることに、私は生まれて初めて気づいた。

彼女もまた、孤独だったのだ。

感情を言葉や形にするのが致命的なまでに拙い彼女は、誰ともその圧倒的な熱量を共有できず、ただ一人でいちばんを目指して走り続けるしかなかった。そして、私の後ろ姿だけを、暗闇を照らす唯一の標識のように見つめていた。

言葉にしなくても、私のこの熱量はあなたに届いているはずだ。そんな傲慢で、けれどそれしか方法を知らなかった、切ないほどの自我。

私はどうだったのだろう。

自分の完璧主義が壊れるのを恐れ、傷つく前に新しい場所へ逃げ回っていた。そして、隣で黙々と努力する彼女を、私をあざ笑う怪物に仕立て上げることで、自分の逃避を正当化していたのだ。他者を理解しようともせず、自分の柔らかい内面を守るためだけに針を逆立てていたのは、私自身のエゴイズムに他ならなかった。

私たちは、お互いを自分の都合のいい生き物としてしか見ていなかった。

「ごめんね」

私の口から出たのは、そんな酷く擦れた一言だけだった。気の利いた慰めも、言い訳も出てこなかった。私の鋭い針はすべて叩き折られ、剥き出しになった心臓が、冬の空気に晒されて痛んでいた。

彼女は、私が放ったその言葉を、じっと噛み締めるように数回瞬きをした。そして、怒るでもなく、泣くでもなく、ただいつもの平板な声で、そっか、とだけ言った。

それだけだった。劇的な和解の抱擁も、涙ながらの告白もない。私たちは相変わらず、感情表現が不器用な女子高生のままだった。

けれど、手元に握られた進路希望の用紙を見つめ直したとき、私の胸を満たしていたあの刺々しい焦燥は、綺麗に消え去っていた。

私は、自分が逃げ続けてきた戦場に、ずっと私を待ってくれている唯一の観客がいたことを知った。完璧でなくても、無様でも、私の背中を追いかけてくれる人間が、すぐ隣にいたのだ。

廊下の窓の向こう、冬の夕日が、かつての図書室のように世界をオレンジ色に染めていく。私たちはどちらからともなく歩き出し、並んで校門へと向かった。

相変わらず言葉はない。彼女の歩幅は一定で、私の歩幅とは少しズレている。けれど、今の私には、その沈黙が檻のようには感じられなかった。

私たちは、完全に分かり合えたわけではない。これからも、言葉の足らなさですれ違い、お互いのエゴで傷つけ合うことはあるのだろう。

それでも、私はもう針の中に閉じこもって逃げ出すことはないし、彼女もまた、ただ無音のまま突き進むだけではないはずだ。

冬の冷たい帰り道、二人の影がアスファルトの上に長く伸びていく。

その影は、以前のように見えない壁で隔てられたものではなく、お互いの歪なトゲの形を確かめ合うように、静かに、けれど確かに並んで進んでいた。